



Title	アメリカ英語での分離不定詞の使用実態調査と考察 : 使用されたsplitterを中心に
Author(s)	福本, 広光
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2018, 2017, p. 75-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69963
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アメリカ英語での分離不定詞の使用実態調査と考察 ～使用された *splitter* を中心に～

福本 広光

キーワード

分離不定詞、歴史的変化、コーパス、副詞分類、語彙化

1. はじめに

本研究では、アメリカ英語における分離不定詞(*split infinitive*)について扱う。通常、英語の不定詞は *to* と動詞の原形を組み合わせることによってつくられるが、分離不定詞は *to* と動詞原形の間に副詞などの要素を挿入したものである。この構造は歴史的に、長らく規範主義によって非難されてきた。¹現代でもその規範意識は残っているようで、Crystal (1988:27-29)によると BBC の英語の苦情の中に分離不定詞の使用も上位に入っていたということである。その一方で、Quirk et al (1985:496-498)などのように、分離不定詞の持つ特長²などを評価してその使用を擁護する文法書が現れ、その偏見が薄れてきたのか、実際に英文を読んでも見る機会が多いと思われる。しかしそれはあくまでも感覚である。英語圏ではどれほど、またどのような形で分離不定詞は使用されているのかについて知る必要がある。分離不定詞に関して、英語史的観点からの記述はかなり表面的なものにとどまりやすく、現代英語における使用についての共時的な研究は多いが、通時的観点からその使用の実態を記述した研究は決して多くない。また Mitrasca (2009)や Röhdenberg (2009:376-378)³のコーパス調査など多くの研究により、特に現代英語において、分離不定詞はイギリス英語よりもアメリカ英語においてより頻繁に使用されているようである。アメリカ英語を選択した理由は、それらの研究から英語圏の中でも分離不定詞の主要な使用域であると考えられたためである。また、分離不定詞そのものについて研究する上で、分離不定詞がとる *splitter* (*to* と原形動詞を「割る」副詞などのこと) について調査することはその核心に迫る重要な点である。本研究では、「アメリカ英語における分離不定詞使用の歴史的実態」について、1810 年から 2009 年までをカバーする 4 億語からなる史的コーパスである COHA (*The Corpus of Historical American English*)を用いて、使用された *splitter* の視点を中心に記述することを目的としている。

2. 先行研究

2.1 分離不定詞の起源について

Curme (1931:458-466), Visser (1966:1035-1045)など多数の文献で、分離不定詞の起源について述べられている。分離不定詞は 13 世紀にその起源が見られ、中英語から近代英語に移っていく中でその使用頻度は徐々に低くなり、16 世紀～18 世紀ごろまでほとんど使用されなかったという。しかし 18 世紀末ごろに復活して急速に拡大し、当時隆盛を極めていた規範主義によって批判の対象となるも、19 世紀より幅広く使用され、著名な作家などにも使用されるようになり、現代英語でも反対をうけることはありながらも存在し続けているという記述が見られる。

2.2 分離不定詞使用の実態に関するコーパス研究

後藤 (2003)は、英米の新聞、雑誌、小説それぞれ数点をを用いて分離不定詞の使用頻度を計算し、小説のほうがジャーナリズム英語よりもより頻繁に分離不定詞を出現させやすいとしている。(ア

¹ Huddleston et al. (2002:581)によると、当時の規範文法はラテン語を手本としており、ラテン語では不定詞を分離することがないので、それを根拠として、英語でも不定詞を「分離」するのはよくない、ということのようである。つまり、分離不定詞の使用には言語学的問題点はないといってよく、Mitrasca (2009:103)によると、現在分離不定詞に対しては「文法的には間違っていないができるだけ避けるべき」という二元的考え方が主流であるようである。

² 分離不定詞を用いることで、副詞がどの動詞を修飾するかという曖昧さが解消できる、英語のリズムがよくなる、など、多くの文法書で分離不定詞の文法的有用性が説かれている。Quirk et al (1985:497)は「分離不定詞の使用を避けることで文がぎこちなくなるほか、非文法的になることがある」ことまでであるとしている。

³ Mitrasca (2009:118)は、アメリカ英語においてイギリス英語よりも 3～4 倍の頻度で分離不定詞を用いるとしている。また、Röhdenberg (2009:378)では「アメリカ英語が分離不定詞の拡大をリードし、イギリス英語はそれに追随している」という趣旨の発言までなされている。これ以外にも分離不定詞がアメリカ英語で、より頻繁に使用されていることを認める研究は多い (Mikulova (2011:22-24), Jang and Choi (2014:60)など)

アメリカ英語では高級紙でも比較的分離不定詞は見られたようである)

Albakri (2005)は、New York Times と USA Today の 2 種類の新聞を用いてアメリカ英語での分離不定詞の使用について概観し、分離不定詞構造は前者では全ての不定詞構造のうち 6%、後者では全てのうち 10% で使用されているとした。そして両新聞で、ほとんどの **splitter** は 1 語副詞であり、**significantly** などの様態の副詞が典型的に用いられ、伝達を強調するために用いられると述べている。

Martin and Garcia (2009)は、時代によって 4 つのイギリス英語コーパス (Lampeter, CLMET, The Corpus of English Novels, BNC) を用いて、近代英語以降 (1640 年から 1920 年)のイギリス英語における分離不定詞が 10000 文あたりどれほど生成されるかの量的変遷を調査した。また、Fiction を中心として分離不定詞に使用される副詞を、意味的視点から **Manner, Time, Frequency, Quantity, Negation, Degree** の 6 つ、また、機能的視点から **Adjunct, Subjunct** に分類し、それぞれ 1710 年から 1920 年までその割合を調査した。

Mitrasca (2009)は、BNC, Google, ANC などのコーパスを用いてそれぞれの英語における分離不定詞について調査した。アメリカ英語ではイギリス英語よりも複合副詞 (compound adverb) や否定詞を分離不定詞においてよく使うということに加え、最もよく用いられる **splitter** として、「様態」「時」「頻度」「程度」からほぼ同数抽出されたとしており、どの種目の分離不定詞が特に多いということはないとしている。また、現代では全ての階級の人々がさまざまな状況下において分離不定詞を使用しており、「規範的規則」を守らせることはもはや時代遅れであるとしている。

Jang and Choi (2014)は、COCA コーパスなどのアメリカ英語コーパスを用いて、現代アメリカ英語では、分離不定詞の使用について話し言葉、書き言葉間の文体上の差はないとし、最も多く使用される副詞は **just, really, actually**, などの **intensifier** であると述べている。

3. 分離不定詞に使用される splitter

3.1 splitter の分類の枠組み

Visser (1966:1035-1045)は分離不定詞を分類するうえで、**splitter** の位置に来るものによって

① (代)名詞②時や場所を表す副詞③様態や程度をあらわす副詞④Not⑤2 語以上の語の 5 つに分類している。ただし、①に関しては、動詞のあとに目的語が来るという語順が確立された現代英語においては見られなくなったとされており、今日では分離不定詞の **splitter** というほとんどの場合副詞を指す。本研究でも、後期近代英語以降を扱うので、**splitter** の示すところは、ほとんどの場合で副詞のことである。

では、「形式と意味」の観点から、**splitter** を大きく分類するには、上記の事柄も踏まえると、例えば図 1 のようになると考えられる。

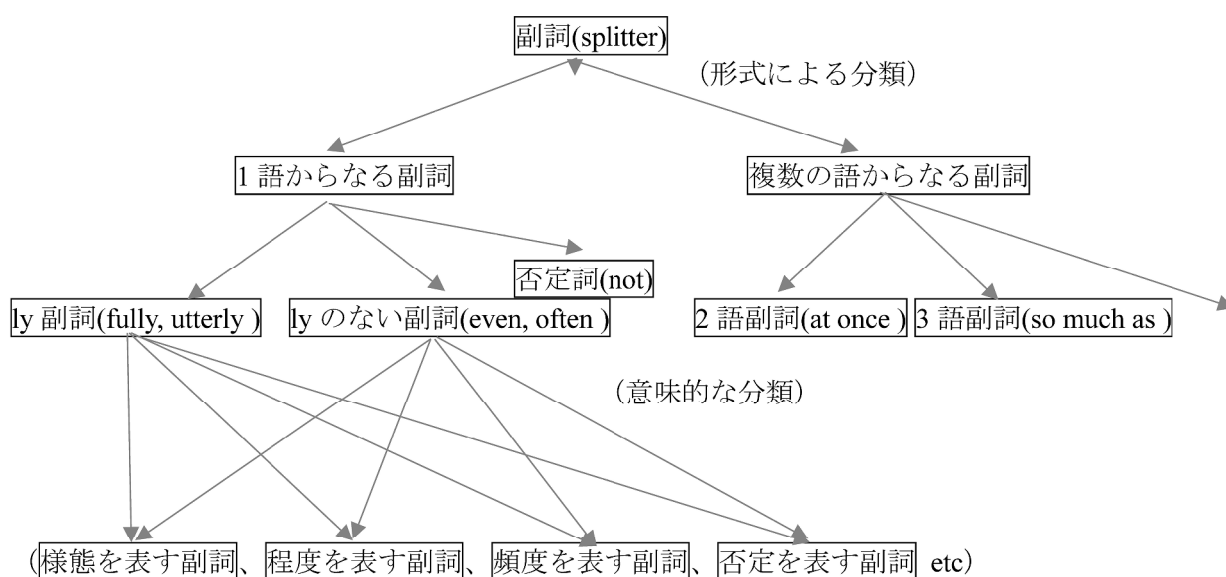


図 1 本研究における **splitter** の分類の枠組みの概略図 (カッコ内はその例)

3.2 副詞の形式的分類と意味的分類

まず、「形式」に着目する。splitter と言っても、その形式は様々である。まず、その splitter が 1 語からなっているか複数の語からなっているかという違いがある。

1 語からなる副詞は、分離不定詞を構成する splitter の中で最も標準的で、かつ多数を占める構造である。さらに形式的な観点からこれを分類すると、接尾辞に ly がつくかどうかで分類される。つく副詞は例えば fully や actually のようなもの、つかない副詞は even, often などがある。(not も ly をとらないタイプの 1 語副詞として考えてもよいともいえるが、ここでは別個のものとして考える。)

その一方で、at once や so much as など、複数語からなる splitter も存在する。

Visser (1966:1043-1044)には、その形式は more than 以外は現代英語ではまれであると書かれており、Mitrasca (2009)や Mikulova (2011)によると、イギリス英語ではほとんど使用されていない用法のようである。

また、このような形式的分類に加え、副詞は用言を修飾する品詞であり、その副詞が指し示す意味についても、いくつかに分類できるはずである。しかしながらその分類には、統一された基準を明確に示したものはあまり存在しない。

その中で、Biber et al (1999:552-560)は、副詞の意味的分類として、

- ①Place (位置、方向、距離を表す副詞。there, backward, far など)
- ②Time (時間位置、頻度、期間時間的関係を表す副詞。now, recently, often など)
- ③Manner (その行為がどのようになされるかを表す副詞。happily, automatically, quickly など)
- ④Degree (程度を限定する副詞。Amplifiers と Diminishers がある。slightly, almost, thoroughly など)
- ⑤Additive/restrictive (新要素を付け加えたり、限定する副詞。just, only, even など。)
- ⑥Stance (意見や評価などに関する副詞。probably, actually, maybe, kind of など。)
- ⑦Linking (ディスコースの結合に役立つ副詞。then, anyway, therefore など。)
- ⑧Others (その他。angiographically, symbolically など。) (まとめは筆者による)

をあげ、基準をある程度設けながら副詞、特に 1 語副詞を意味的に分類している。

今回は、この区分をできるだけ参考にしながら、コーパスから抽出された例文の文脈を一つ一つ判断していき、それぞれの文に用いられる副詞を分類する。

本研究は、アメリカ英語コーパスを用いて、分離不定詞の各形式が、いつ、どれほど、どのようなジャンルで使用されてきたかを量的に分析し、質的分析として、特定の年代にみられる分離不定詞のとり副詞はどのようなものであり、どのような文体のもとで使用され、そこには変化があるのか、また、あったとすればどのような変化が見られるのか、について記述することにした。

4. 形式的分類を行った分離不定詞頻度の史的変遷

4.1 1 語副詞を用いた分離不定詞の史的変遷 (ly 副詞+ly なし副詞)の分析

表 1 1810 年から 2009 年までの分離不定詞(1 語副詞)の頻度の歴史的変遷 (100 万語あたり)

1810s	1820s	1830s	1840s	1850s	1860s	1870s	1880s	1890s	1900s
11.01	5.92	4.50	7.42	13.17	16.65	33.19	32.73	27.96	27.97
1910s	1920s	1930s	1940s	1950s	1960s	1970s	1980s	1990s	2000s
20.40	14.66	13.40	10.64	17.07	23.56	34.89	42.46	75.51	97.07

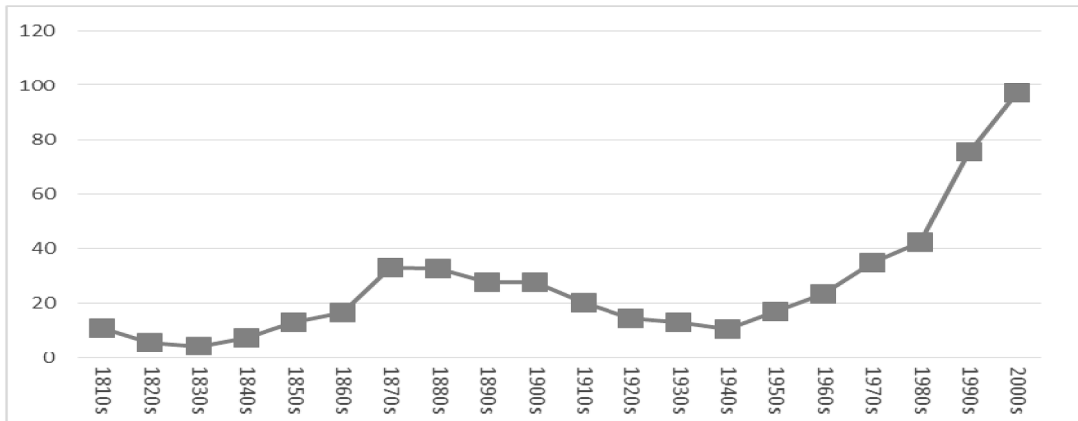


図2 1810年から2009年までの分離不定詞(1語副詞)の頻度の歴史の変遷 (100万語あたり)

まず、アメリカ英語における1語からなる分離不定詞全体の頻度の変遷を大まかに見てゆくことにしよう。図2は、1810年から現在までの1語副詞をはさむ分離不定詞の頻度の変遷である。19世紀ごろに復活した分離不定詞は、当時隆盛を極めていた規範文法によって非難され20世紀中盤ごろまで浮き沈みを繰り返していたが、消えずに残っていた。1950年代から徐々に、そして1990年代からその頻度を大きく増加させ、現代に至る。このことから、特に現代英語において分離不定詞が規範主義に遠慮することなく比較的自由に使用されるようになってきたということが読み取れる。

また、Jespersen (1940:331)や後藤 (2003:73-91)は、分離不定詞は、編集に厳格な管理がなされている新聞や雑誌などのジャーナリズム英語よりは文学作品からの用例が多いと述べている。特に後藤は、小説はその著者の文体上の好みがあるまま反映され、他から一切干渉を受けないために分離不定詞をより頻繁に生起させやすいとしている。一方で、Onions (1904:129)は、特に新聞でこの構造が頻繁に見られるようになっており、言説が一致しない部分がある。2章で見たように、各ジャンル別に分離不定詞の頻度を考察している研究はあったが、実際どのような分布をしているのであろうか。テキストジャンル別に各時代の分離不定詞の頻度について検索すると、以下のような結果が得られた。

表2 各テキストジャンルにおける1語副詞の分離不定詞頻度の変遷 (100万語あたり)

	1810s	1820s	1830s	1840s	1850s	1860s	1870s	1880s	1890s	1900s
Fiction	4.23	3.18	2.18	4.11	7.47	7.68	12.44	14.57	16.46	16.97
Magazine	3.39	1.01	0.51	1.00	2.91	4.69	10.24	7.97	5.58	6.11
Newspaper						0.59	5.98	4.87	2.62	1.99
Non-Fiction	3.39	1.73	1.81	2.31	2.79	3.19	4.53	5.32	3.30	2.90
	1910s	1920s	1930s	1940s	1950s	1960s	1970s	1980s	1990s	2000s
Fiction	12.33	6.98	7.11	5.46	9.86	11.34	15.03	15.05	26.27	33.25
Magazine	1.85	2.30	1.34	0.82	2.24	4.59	6.84	8.69	25.12	31.59
Newspaper	1.94	3.51	3.21	2.92	3.14	4.25	7.52	10.74	14.24	17.32
Non-Fiction	4.27	1.87	1.75	1.44	1.83	3.38	5.50	7.98	9.88	14.81

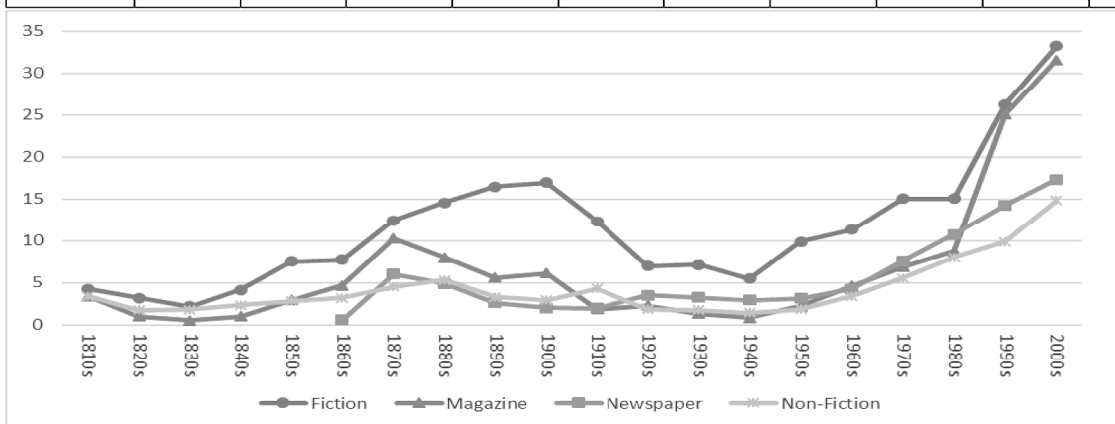


図3 各テキストジャンルにおける1語副詞の分離不定詞頻度の変遷 (100万語あたり)

やはり、Fiction ジャンルでの使用が最も多い。とりわけ、1910 年代頃まではそのシェアを Fiction がほとんど占めるという結果となっているが、全体の頻度の減少とともに Fiction でも頻度を落とし、1950 年以降全てのジャンルで再び伸びていった。それまではどちらかといえば少なかった Newspaper や Non-Fiction でも特に 1950 年以降、着実に増加を見せているが、ここで注目すべきは、1980 年代から 1990 年代にかけての Magazine ジャンルでの急激な増大である。Fiction ジャンルでもこの期間に約 2 倍になっているが、Magazine ジャンルでは 3 倍近く増加し、Fiction ジャンルに肉薄している。Newspaper や Non-Fiction ジャンルの増加が比較的緩やかなことを鑑みても、1980 年代以降の 1 語分離不定詞全体の増加の要因の 1 つとして Fiction と Magazine での急増があることは明らかであり、とても興味深い。

4.2 ly 副詞を用いた分離不定詞の変遷

4.2.1 ly 副詞の分離不定詞副詞中の分布

既に述べたように、1 語副詞を区分する上で ly 副詞かどうか、というものがある。まず、今回の研究の中で ly を伴う副詞はどれほどの割合を保っているのかを見てゆく。

表 3 全ての 1 語副詞中における ly 副詞の割合

(数値はトークン数)

	1810s	1820s	1830s	1840s	1850s	1860s	1870s	1880s	1890s	1900s
全ての副詞	13	41	62	119	217	284	616	665	576	618
ly副詞	7	19	25	65	117	176	416	432	348	377
ly副詞の割合	53.8%	46.3%	40.3%	54.6%	53.9%	62.0%	67.5%	65.0%	60.4%	61.0%
	1910s	1920s	1930s	1940s	1950s	1960s	1970s	1980s	1990s	2000s
全ての副詞	463	376	330	259	419	565	831	1075	2110	2870
ly副詞	262	203	165	115	203	322	531	678	1364	1917
ly副詞の割合	56.6%	54.0%	50.0%	44.4%	48.4%	57.0%	63.9%	63.1%	64.6%	66.8%

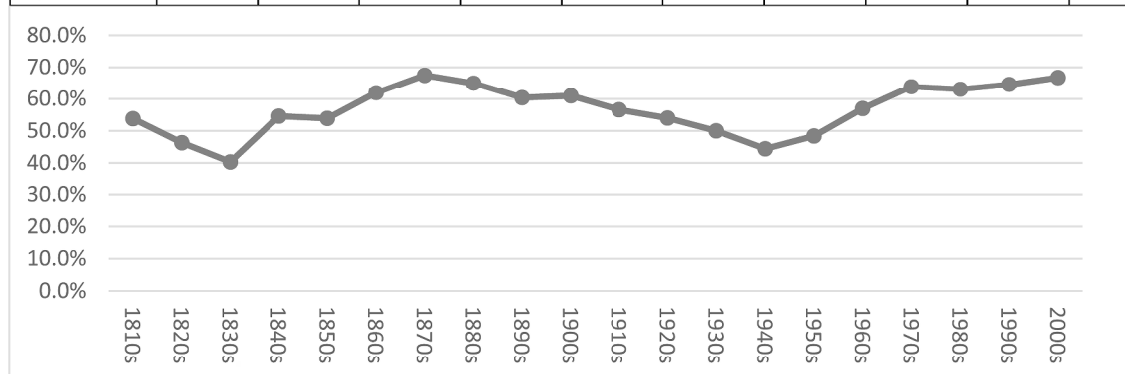


図 4 全ての 1 語副詞中における ly 副詞の割合 (ly 副詞のトークン数/全体のトークン数×100)

どの年代も基本的に 50~60%前後で推移しており、割合としてはそこまで高くないことがわかる。Burchfield(1996:738)は、分離不定詞の splitter として最も用いられるのは even, ever, further などのような単純副詞(simple adverb)であり、ly 副詞も同じくらい多いが前者ほどではない、と述べている。ある程度の割合で安定しており、決して少ないわけではないが、上記のような単純副詞が根強いので、ly 副詞はあまり多く使われることがないのかもしれない。

4.2.2 ly 副詞をとる分離不定詞のテキストジャンル

また、ly 副詞を用いた分離不定詞がどのようなテキストジャンルで生起するのかについても調査した結果が、以下である。

表 4 各テキストジャンルにおける分離不定詞(ly 副詞)の頻度の歴史の変遷 (100 万語あたり)

	1810s	1820s	1830s	1840s	1850s	1860s	1870s	1880s	1890s	1900s
Fiction	0.85	1.73	1.38	2.12	4.01	4.16	7.76	9.60	9.71	9.68
Magazine	3.39	0.14	0.22	0.62	1.88	3.64	7.11	5.41	3.50	4.34
Newspaper						0.35	4.09	3.2	1.46	1.09
Non-Fiction	1.69	0.87	0.22	1.31	1.21	2.17	3.45	3.05	2.23	1.95
	1910s	1920s	1930s	1940s	1950s	1960s	1970s	1980s	1990s	2000s
Fiction	6.56	3.12	3.13	2.05	4.07	5.21	8.15	7.51	13.56	18.33
Magazine	1.19	0.90	0.45	0.29	1.06	2.79	4.49	5.93	18.22	22.80
Newspaper	1.19	2.42	1.99	1.60	1.91	3.09	5.29	7.31	9.73	12.28
Non-Fiction	2.60	1.48	1.14	0.78	1.22	2.34	4.37	6.04	7.30	11.40

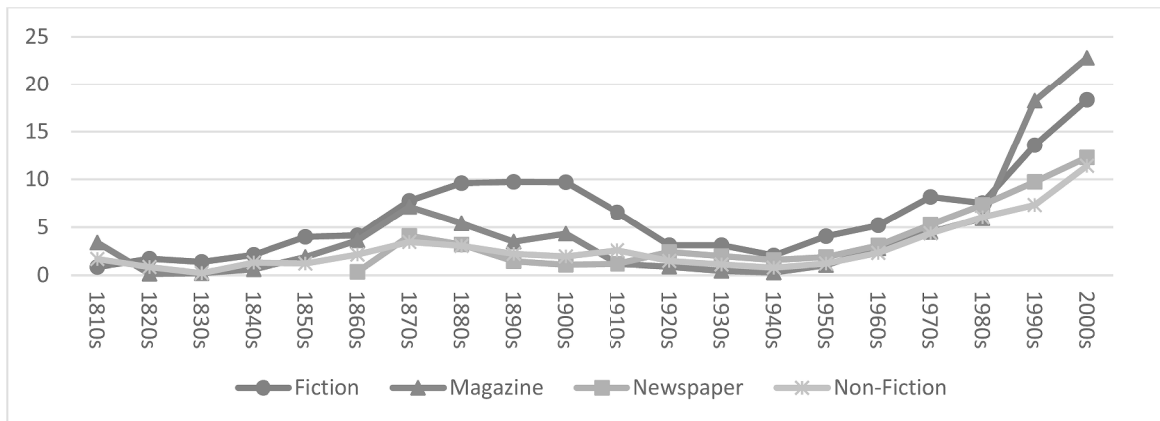


図5 各テキストジャンルにおける分離不定詞(ly 副詞)の頻度の歴史的変遷 (100 万語あたり)

基本的には 4.1 章で見たグラフと同じであるが、注目すべきは 1980 年代以降である。先述のグラフでも Magazine ジャンルがこの時期に急増していたが、ly 副詞の場合は Fiction ジャンルを追い越してしまっている。また、Newspaper や Non-Fiction でも先述のグラフほど Fiction との差はなくなっているといえる。ここから考えられることは、

- ・ Fiction ジャンルで、ly 副詞以外の副詞が多用されている。
- ・ 作家個人の文体が出づらく、どちらかといえば書き言葉的であるジャーナリズム英語において、ly 副詞を使用した分離不定詞が認められるようになった。

のどちらかであることが推測できる。

4.3 Pilot Study: 1900 年代 2000 年代の Fiction ジャンルにおける分離不定詞変遷

この章では、イギリス英語に関して時代ごとの分離不定詞に使用されている副詞の変遷を意味論的に分析した Martin & Garcia (2009:352-354) から着想を得て、アメリカ英語の特に Fiction ジャンルにおいて、特定の年代に分離不定詞に使用された副詞について具体的に取り上げ、その splitter の役割を持つ副詞の変遷について調査する。扱う年代は 1900 年代と 2000 年代であり、各時代で”to [r*] [v:i*]”と検索して得られた例文のうち、最初に出てきた 100 例⁴を抽出して、そのうち、頻度の上位であった副詞 10 語を挙げるとともに、各副詞をカテゴリーごとに分類してその変化を見ることにする。分類には 3.2 章にあげた基準を主に使用する。

表 5 1900 年代、2000 年代の分離不定詞に使用された副詞の上位 10 個 (カッコ内はトークン数)
(2000 年代の 2 例の副詞は他にも見られたが、アルファベットの若いものをリストに入れた)

	1900s	2000s
1	so (8)	just (13)
2	just (6)	really (8)
3	really (4)	even (7)
4	even (4)	actually (7)
5	always (3)	never (4)
6	boldly (3)	ever (4)
7	ever (3)	finally (3)
8	kindly (3)	better (3)
9	quite (3)	either (3)
10	thoroughly (3)	always (2)

抽出した例文における分離不定詞に用いられた副詞のうち頻繁に用いられた上位 10 語をあげると表 5 のようになった。用例がそれぞれ 100 例ずつしかないので、確定的なことは言えないが、

⁴ 例文を抽出するときに、数を 100 文に合わせるために、例文の該当箇所” from time to time 原形動詞”などの分離不定詞以外の構造が見受けられたときはそれを除き、代わりとなる 101 例目以降を抽出するようにした。

これだけの例でも、どちらの時代も **even** や **just**, **ever** などの副詞が上位に来ており、Burchfield (1996:738)の「分離不定詞に最も使用される副詞は **even**, **ever**, **further** などの **simple adverb** である」という言説に真実味を与えている。

ある時代において特徴的な副詞という観点からすると、1900年代においては **so** であると思われ、2000年代には **actually** や **finally** などがそれにあたると思われる。共通して頻度の高い **just**, **really**, **even** 以外の、それぞれの最上位頻度の副詞である **so** を用いた分離不定詞と **actually** を用いた分離不定詞の変遷を比較してみると、以下ようになる。

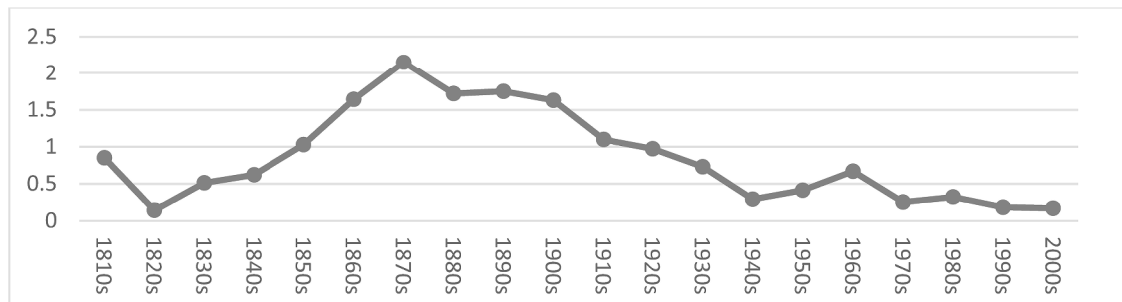


図 6 so を副詞としてとる分離不定詞の変遷 (to so [v?i*]) (100 万語あたり)

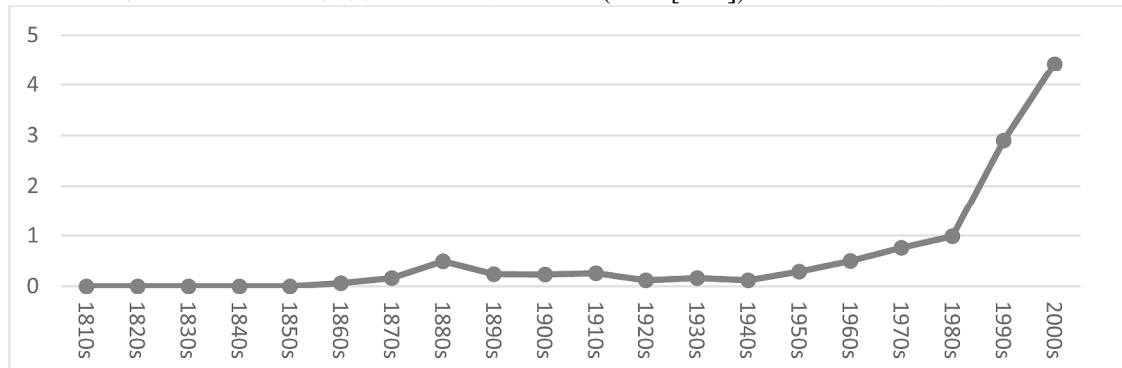


図 7 actually を副詞としてとる分離不定詞の変遷 (to actually [v?i*]) (100 万語あたり)

図 6 と図 7 を比較するとわかるように、**so** は 19 世紀～20 世紀初頭までの分離不定詞においてよく用いられていたが、1910 年ごろから下火になり、現在ではほとんど使用されていない。逆に **actually** は、19 世紀～20 世紀中盤ごろまではほとんど使用されなかったが、20 世紀後半、特に 1980 年代以降に急速に使用されるようになってきた。このように、分離不定詞を構成する副詞には、共通した副詞がどの時代にも使用されることもあるが、時代ごとに特徴的な副詞もまた存在するということが言えるであろう。今回は 20 年分しか観察しなかったが、さらに手広くあらゆる年代を観察することにより、新たな発見があるかもしれない。また、**so** と **actually** を分離不定詞に用いた例を以下に示す。

- (1) I accordingly busied myself the next few days with this question, and was fortunate enough **to so interest** the proper authorities that an order was issued for the exhumation and examination of the body. (Fiction, 1900: *A Difficult Problem* 1900.)
- (2) For E-training to be effective, it has to both reach a wide audience quickly and deliver information in a way that allows the audience **to actually absorb** it. (Magazine, 2002: *U.S. News & World Report: 10/15/2001: Vol. 131 Issue 15*)

これに加えて、両年代において使用されている副詞の 1 つとして、**either** がある。この **either** はいずれも **either A or B** の相関構文の形の一部をなしており、2000 年代には、この構造は、抽出した用例のうち異なる出どころから 3 例も抽出された。(1900 年代にも異なる出どころから 2 例抽出されている)以下、それぞれの年代における用例を示す。

- (3) As a rule, the last comer in an outfit has sense enough **to either use** his eyes or ask questions. (Fiction, 1909: *Happy Hawkins*.)

(4)About how lonely she had been, a stranger in a strange place, looking out onto a sea of faces waiting expectantly for her **to either fail** miserably or to walk on water. (Fiction, 2006: *All mortal flesh*)

また、各時代に使用されていた副詞の変化について見てゆく。

1900年代から抽出された副詞では

Place: None

Time: always, ever (×3), immediately, now, temporarily(×2), occasionally, sometimes(×1)

Manner: boldly, kindly(×3), safely, arbitrarily (×2), plainly, firmly, quietly, secretly, regretfully, openly, suddenly, slowly, clearly, mentally, seriously, comfortably, softly, hurriedly, deliberately, better, buoyantly, timorously, ingenuously, rudely, lazily, naturally, visibly, publicly, properly, innocently, blushin'ly, personally, so(×1) (blushin'ly は blushingly として考えた)

Degree: so(×7), quite, thoroughly(×3), fairly, greatly(×2), utterly, half, slightly, sorely(×1)

Additive/restrictive: just(×6), even(×4),either, still(×2), ispecially, further(×1) (ispicially は especially として考えた)

Stance: really(×4), actually, frankly(×1)

Linking: thus(×1)

Others: intellectually, legally, never(×1)

という内訳になっており、これらをまとめると、以下のようになる。

表 6 1900年代の Fiction の分離不定詞サンプルにおける副詞のカテゴリー別トークン数

Manner	39
Degree	21
Additive/restrictive	16
Time	14
Stance	6
Others	3
Linking	1
合計	100

一方で、2000年代から抽出された副詞では

Place: None

Time: ever, never (×4), finally (×3), always, later (×2), already, immediately, forever, now, simultaneously, then, twice (×1)

Manner: better (×3), formally, physically, slowly, suddenly (×2), adequately, affectionately, discretely, easily, firmly, forcibly, gently, literally, noisily, officially, openly, personally, quietly, seriously, softly, somehow, systematically (×1)

Degree: really (×8), completely, fully (×2), almost, fucking, slightly, totally, sorely(×1)

Additive/restrictive: just (×13), even (×7), either(×3), merely, simply(×1)

Stance: actually (×7), truly (×1)

Linking: None

Others: None

という内訳になっており、これらを先ほどと同様にまとめると、以下のようになる。

表 7 2000年代の Fiction の分離不定詞サンプルにおける副詞のカテゴリー別トークン数

Manner	28
Additive/restrictive	25
Time	22
Degree	17
Stance	8
合計	100

このように見ると、やはりいずれの時代も **Manner adverb**,すなわち様態の副詞が最も頻繁に使用されており、**Albakri (2005)**の指摘した通り、分離不定詞においてももっとも典型的なカテゴリーであるということがうかがえる。しかし、現在は、1900年代と比較して、**Mitrasca (2009)**でも述べられていたように「様態の副詞」の比率ばかりが圧倒的に多いわけではない。複数のカテゴリーの副詞が昔と比較して万遍なく使用されようとする傾向にあるのではないかと考えられる。しかも、1900年代の副詞のタイプ数は61種類あったのに対し、2000年代は49種類しかなかった。つまり、分離不定詞は頻度的には多く使用されるようになり、テキストジャンルの観点からも幅広く使用されるようになったが、先述の理由により、比較的自由に分離不定詞を使用できると考えられる **Fiction** ジャンルにおいて、使用される副詞の多様性が失われ、「使用される副詞」もある程度固定されるようになってきていると言えるかもしれない。

今回のパイロットスタディはあくまでも20年分の比較にすぎず、また分析されたサンプル数も少ないが、今後さらに幅広い年代を観察して分離不定詞の変化について傾向をつかむための手掛かりとなり得るのではないかと考えている。

5.副詞の位置に複数語をおく分離不定詞

この章では、複数語からなる **splitter** を用いた分離不定詞頻度の歴史的変遷に着目する。最長で4語からなるものまでであるので、2語、3語、4語おのおのについて変遷を調査する。

5.1 複数語からなる副詞を用いた分離不定詞の意味的側面について

複数語からなる副詞は、本研究では2語からなるもの、3語からなるもの、4語からなるものが観察された。別の観点からみると、それらは、ほとんどの場合以下の2つに分類、集約することができる。⁵

(i)N語で一つの意味を成すもの (ここではN=2,3,4)

(ii)ある副詞が、意味のメインの役割を持つ副詞の意味を強調、もしくは限定(もしくはぼかし)の役割を担っているもの

(i)は例えば以下のようなものである。

(5) The light quivering against the table silver seemed ***to at once encourage*** her excitement and to flash a warning signal: careful, dear. (COHA, 2006, FICTION)

ここでの **at once** は、確かに数の上では2語から構成されてはいるが、これらはこれ以上分けることができず、その要素が揃うことによってはじめて意味を成す。つまり、語数的には複数語からなっているが、意味的には実質上1語副詞と同じものであり、**idiomatic** で **Lexicalize** された存在であると言える。

また、(ii)とは、以下のようなものである。

(6) In light of the recent studies, the World Health Organization is considering whether ***to more strongly encourage*** health workers in developing countries to use, where affordable, a combination of nevirapine and one or more other drugs, rather than nevirapine alone. (COHA, 2005, MAGAZINE)

(7) Like the Irish Roman Catholic sympathizers who "left their back doors open" to allow IRA fugitives to evade British troops during the Northern Ireland Troubles, the citizens of the Sunni Triangle around Baghdad are apt ***to at least passively support*** an insurgency. (COHA, 2003, MAGAZINE)

ここでの **more strongly** は、副詞 **more** が **strongly** を強めるという、「ある副詞がある副詞を修飾して意味を成す」ものである。また、**at least passively** などもこの区分に入ると考えられるが、それは上で述べたように、**at least** は **Lexicalize** された副詞であり、また(3)が「バグダッド周辺のスンニトライアングルの市民たちは反乱に対し、少なくとも消極的に援助しがちである」という意味であることから、**passively** の度合いを限定するもの、となっている。つまり、形式上は3語からなっているが、機能的には(i)と実質的に同じであり、しかもその中でもメインで意味を担ってい

⁵ 複数語からなる副詞の分類、また「複数後副詞の語彙化」について、大阪大学の渡辺秀樹教授にアドバイスをいただいた。

る副詞は *passively* である。つまり、*passively* という副詞がこの中でメインの意味を担い、*at least* という 2 語副詞 (実質 1 語副詞) がそこにくっついて意味を強めているというだけであると言えよう。

これらのことから、本研究から得られたデータを基にすると分離不定詞に使用される複数語からなる *splitter* というのは、意味的に *Lexicalize* された前置詞句的な副詞だけではなく、一方の「強調か限定 (もしくはぼかし)」の意味を持つ *splitter* がメインの意味を持つ副詞を修飾するというパターン (またはそれらを組み合わせたもの) のどちらかがほとんどであり、レトリックの観点からしても独特のリズムを生み出すことができるので、今後も広く使用されてゆくと考えられる。

5.2 複数語からなる副詞を伴う分離不定詞の歴史の変遷、副詞の種類など

5.2.1 2 語副詞の変遷 ((i)と(ii)の両パターンを合わせて考えたもの)と分類

表 8 1810 年から 2009 年までの分離不定詞(2 語副詞)の頻度の歴史の変遷 (100 万語あたり)

1810s	1820s	1830s	1840s	1850s	1860s	1870s	1880s	1890s	1900s
0.85	0.00	0.00	0.25	0.30	0.53	1.08	0.69	1.07	0.95
1910s	1920s	1930s	1940s	1950s	1960s	1970s	1980s	1990s	2000s
1.28	0.66	0.98	0.70	1.26	1.21	1.30	1.50	2.04	3.01

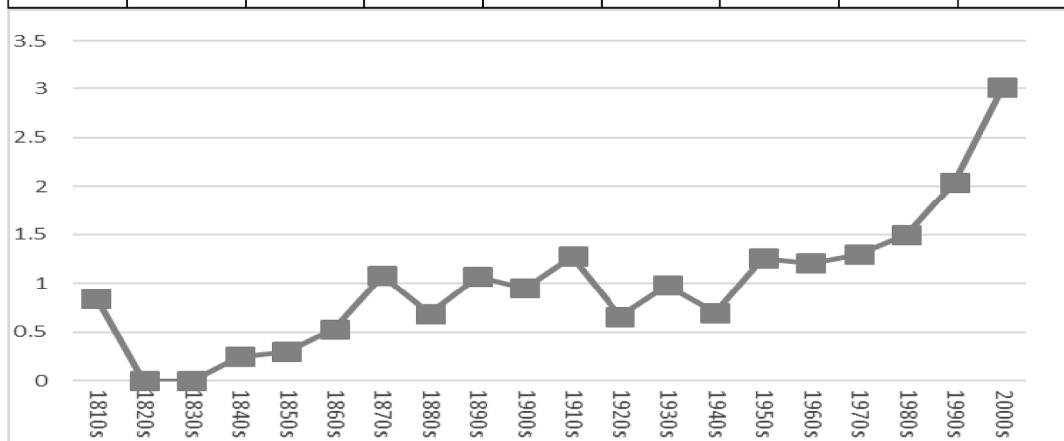


図 8 1810 年から 2009 年までの分離不定詞(2 語副詞)の頻度の歴史の変遷 (100 万語あたり)

中英語期からこれに類する形は存在している(Visser (1966:1043))のであるが、1810 年代には既に見られている。1840 年代以降、その頻度を上下させながらも、1960 年代以降は、1 語副詞の場合と同じように徐々に頻度を増やしている。

どのようなものが用いられてきたかについて、4.2 章に近い要領で 1900 年代と 2000 年代の副詞を分類、比較してみたい。

1900 年代に用いられていた 2 語副詞 ((i)のパターン)

sort of (×4), at once (×3), at least (×2), at first, kind of, once more, no longer, all but (×1)

1900 年代に用いられていた 2 語副詞 ((ii)のパターン)

so logically, still further, very greatly, most emphatically, how justly, most indelicately, almost accurately (×1)

2000 年代に用いられていた 2 語副詞 ((i)のパターン)

at least (×39), kind of (×14), once again (×11), sort of (×9), once more (×2), at once, no longer, anything but, at last (×1)

2000 年代に用いられていた 2 語副詞 ((ii)のパターン)

never again (×2), ever again, more strongly, never once, so easily, just wisely, most adequately, just barely, just simply (×1)

各年代のトークン数を足し合わせてその頻度を割合とともに図にしたのが以下である。

表 9 各年代の分離不定詞における 2 語副詞の数 (カッコ内は割合)

	1900年代	2000年代
(i)のパターン	14(66.7%)	79(88.8%)
(ii)のパターン	7(33.3%)	10(11.2%)

全体量の増加とともに、副詞のタイプ数も2000年代の方が多くなっている。

どちらの年代であっても、(i)のパターンの方が分離不定詞においては主流であるということは変わっておらず、(ii)のパターンの数は2000年代に高まっているが、(i)のパターンは時代にかかわらず一定数以上常に見られる用法である。

5.2.2 3 語副詞

表 10 1810 年から 2009 年までの分離不定詞(3 語副詞)の頻度の歴史の変遷 (100 万語あたり)

1810s	1820s	1830s	1840s	1850s	1860s	1870s	1880s	1890s	1900s
0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.22	0.15	0.15	0.09
1910s	1920s	1930s	1940s	1950s	1960s	1970s	1980s	1990s	2000s
0.31	0.04	0.08	0.12	0.00	0.08	0.04	0.08	0.11	0.14

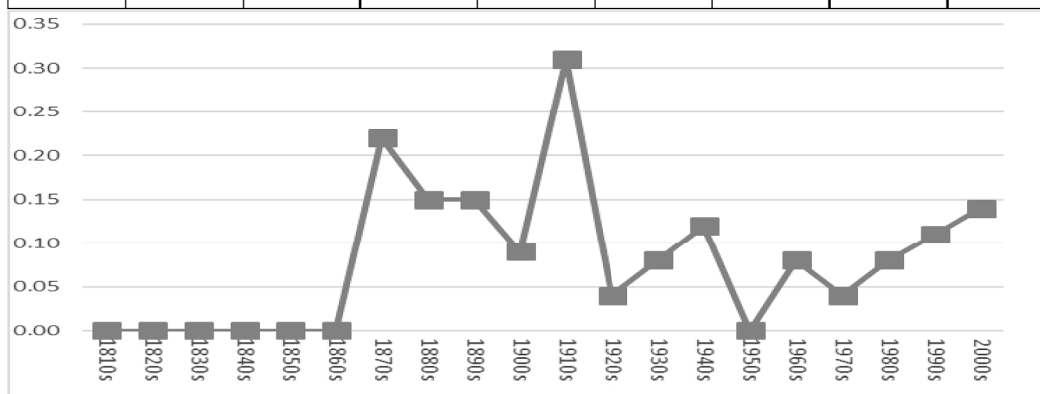


図 9 1810 年から 2009 年までの分離不定詞(3 語副詞)の頻度の歴史の変遷

(100 万語あたり)

その初出は 1872 年である。2 語 *splitter* と比較して頻度は大きく下がる。全部で 37 例であり、決して多くはないが初出から 2000 年代になるまで各年代において 1~4 例ほどコンスタントに抽出された。*so much as* がそのうちの 34 例(91.9%)を占め、それ以外には 1990 年代になるまで抽出されなかった。(*kind of inconspicuously* が 1990 年代に 1 例、 *at least passively*, *at least momentarily* が 2000 年代に 1 例ずつ見られた)

以下に用例の一部を示す。*so much as* の場合、分割されていることが多かったが、*not* と共起して *not so much as* の構文の一部を表しているのではないかと思われる例も見られた。Fiction のみから用例が抽出されたわけではなかったが、それでも Fiction からの用例が多かったことから、この用法も作家の好みの文体を表していると考えられる。

(8)Very slowly and carefully, so as not ***to so much as rustle*** a leaf, she began to crawl around so as to come up on the back side of the hill. (1916, Fiction: “*The Adventures of Prickly Porky*”)

(9)It is important ***to at least momentarily unchain*** the wedding from marriage or even couplehood and to explore the dynamic between weddings and the marriages they supposedly stand for or produce.

(2002, Fiction: *The wedding complex : forms of belonging in modern American culture*)

5.2.3 4 語副詞

19 世紀には 1 例も見られず、その初出は 1912 年である。頻度は 3 語副詞よりもさらに少なく、全部で 6 例であった。*all of a sudden* を用いたものが 5 例(83.3%)、(1910 年代に 1 例、1950 年代に 2 例、1990 年代に 1 例、2000 年代に 1 例)*once and for all* を用いたものが 1 例(16.6%)(1990 年代)見られた。Fiction で 3 例(1910 年代 1 例、1950 年代 2 例)、Newspaper で 3 例(1990 年代 2 例、2000

年代 1 例) ずつ見られたが、いずれも会話文、もしくは直接話法中での使用であった。これらのことからわかるように、この用法は極めて口語的な文体で使用されていると考えることができる。以下に例の一部を示す。

(10) MIKE: Now, wait a minute. Don't say nothin'. No, boys, it's no go. No go. Now, you remember, I told you when you come in on this kid, that I couldn't promise you nothin' but a great lady athlete. No tricks, no deals, no nothin'.

SPEC: You think it's fair to us to all of a sudden go legitimate?

(1952, Fiction: "Pat and Mike" (Movie Script))

(11) " He's been living too good for too many years to all of a sudden stop eating and start working. "

(1958, Fiction: "Enemy Camp")

(12) It is time to once and for all downsize our government whereby a 10 percent tax rate will work.

(1996, Newspaper: "Houston Chronicle: 960217: a; Viewpoints; Pg. 35)

6. まとめ

本研究では、アメリカ英語における分離不定詞の使用の史的実態を捉えるために、COHA コーパスを用いて多角的な視点から調査を行った。

この研究で判明したことは、まず、現代英語でその勢いを伸ばしている分離不定詞は 1980 年以降急激に増大しているが、その背景に Magazine ジャンルにおける急速な拡大があること、特に *ly* 副詞が近年、Magazine ジャンルで急速に使用されるようになっていったことである。

また、1900 年代と 2000 年代の分離不定詞における副詞の比較を行い、そこに見られる副詞には共通するものもあるが、使用される副詞には同じアメリカ英語であっても時代ごとに差も見られる。また、カテゴリー別に見ると、分離不定詞には様態の不定詞が使われることが最も典型的であるが、現在はどれかが突出しているというよりは、ある程度万遍なく利用されるようになってきていること、そして少なくとも Fiction では、かつてと比較して分離不定詞に使用される副詞が決まってきつつあることも示唆された。

それに加え、今回の調査では、複数語からなる *splitter* について先行研究では言及されていないことに、

(i) *Lexicalize* されており、1 つの意味しか持たない *idiomatic* なもの

のほかに、

(ii) ある副詞がもう一つの副詞を修飾（強調や限定、ぼかしなど）するもの

があり、これらの 2 パターンが分離不定詞を構成する複数語の *splitter* としてはほとんどであるということが確認された。

今後の課題として、特に 4 章のパイロットスタディで行った副詞分析を発展させ、

- ・さらに幅広い年代における副詞を、さらに大きなサンプル数のもとで比較する。
- ・Fiction ジャンル以外のテキストジャンルに現れる副詞にも目を向けてその変遷を比較する。

それ以外には、

- ・1980 年代以降の Magazine ジャンルでの拡大の背景（とりわけ *ly* 副詞）
- ・分離不定詞に用いられる副詞について機能的分類(Adjunct, Subjunct)の変遷
- ・イギリス英語での使用の実態の調査
- ・どのような状況や場面において分離不定詞がよく使われているのかという、談話的な観点からの調査
- ・1 語副詞の中で *not* を用いたものを今回は調査対象からはずしているが、その使用の実態に関する調査研究

など、多くあげられるが、これらに関しては稿を改めて論じる必要がある。

(謝辞)

本論文を執筆するにあたり、大阪大学の渡辺秀樹先生には主に内容面、また論文の文体に関して多数の貴重なご指導、アドバイスをいただき、田畑智司先生には主にレイアウト面に関して多数の貴重なご指導、アドバイスをいただいた。この場をお借りして、感謝申し上げます。なお、本論文の誤りは、言うまでもなくすべて筆者の責任である。

参考文献

- Albakry, Mohammad. A. (2005) *Style in American newspaper language: Use and usage*. Unpublished Doctoral Dissertation Thesis. Northern Arizona University, US.
- Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad, Edward Finegan. (1999) *Longman grammar of spoken and written English*. Harlow: Pearson.
- Burchfield, Robert William (1996). *The new Fowler's modern English usage*. Oxford: Clarendon Press.
- Crystal, David. (1988) *The English Language*. London: Penguin.
- Calle-Martín, Javier, and Antonio Miranda-García (2009) "On the use of split infinitives in English." In A. Renouf and A. Kehoe (eds.), *Corpus linguistics: refinements and reassessments*. Amsterdam; New York: Rodopi: 347–364.
- Curme, George. Oliver. (1931) *A Grammar of the English language. Volume3: Syntax*. Boston: DC: Heath.
- Huddleston Rodney and Geoffrey K. Pullum. (2002) *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jang Youngjun and Sunjoo Choi. (2014) "Split infinitives in English: A corpus-based investigation". *Linguistic Search 31*: 53–68.
- Jespersen, Otto. (1940) *A Modern English Grammar on Historical Principles: Part5, Syntax*. London: George Allen & Unwin.
- Mitrasca, Marcel. (2009). "The split infinitive in electronic corpora: Should there be a rule?" *Concordia Working Papers in Applied Linguistics, 2*: 99–131.
- Mikulová, Hana. (2011). "Split infinitive–Corpus analysis." Unpublished Masteral thesis, Palacký University in Olomouc.
- Onions, Charles Talbut. (1904) *An Advanced English Syntax: Based on the Principles and Requirements of the Grammatical Society*. London: Swan Sonnenschein.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech & Jan Svartvik. (1985) *A comprehensive grammar of the English language*. London and New York: Longman.
- Rohdenburg, Günter, and Julia Schlüter, eds. (2009) *One language, two grammars? Differences between British and American English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Visser, Fredericus. Theodorus. (1966) *An historical syntax of the English language: Part2*. Leiden: Brill.
- 後藤弘 (2003) 『現代英語の文法と語法：実証的研究』英宝社: 73–91, 115–126.
(『分離不定詞構造について』『英米の新聞英語における分離不定詞構造』)

コーパス

- Davies, Mark. (2010) *The Corpus of historical American English (COHA): 400 million words, 1810–2009*, Brigham Young University.